

## ゼーリック艦隊ついに勝つ【第二稿】

遠野秋彦

「ゼーリック閣下」

声を掛けてくる者があったので、中央軍総監のゼーリック国家元帥は振り返った。

振り返るまでもなく、声で相手が誰か分かった。

親衛隊長官ハイドム・ギムレーだ。

嫌な奴だ。

できれば会話などしたくない。

しかし、今は大事の前なのだ。

嫌っていても返事ぐらいしてやる。

「なんであるか」とゼーリックは返事をした。

「三ヶ月ほど前になりますが、泥酔者を処罰する法律には閣下も賛成されたと記憶しますが」

確かに、そんな法律があった。提案者はギムレーだ。しかし、帝都バレラスで泥酔して醜態を晒す者には厳罰を処す、という法律にゼーリックも反対ではなかった。なぜなら、純血ガミラス主義に染まったゼーリックにとって、統治者として威厳を欠く泥酔者は困った存在だったからだ。この法律で、彼らがもう少しマシになればよし、ダメなら厳罰も有効だと考えていた。提案者ギムレーとゼーリックの思惑は違うが、結果としてこの法律には2人とも賛成した。そして、今は施行されている。

「そんな昔の話を蒸し返して、どういうつもりであるか」とゼーリックは質問した。

「本日未明、1人の泥酔者がバレラスで逮捕されました。全裸で寝ていたところをパトロール中の警官に発見されたのです」

「それは警察に仕事であって、貴公の親衛隊の仕事ではなかろう」

「いえ。逮捕されたのは軍人でしたので、こちらに回されてきました」

「ふむ」ゼーリックは考え込んだ。

確かに警察と軍は少々仲が悪く、問題を荒立てたがらない。だから、逮

捕者が軍人だと軍側の司法に引き渡しがちだ。しかし、今ではすっかりMP(ミリタリーポリス)は弱体化して、親衛隊の天下だ。親衛隊に引き渡されてもおかしくはない。

「確か、全裸で寝ると裁判抜きで矯正施設送りか、それに相当する刑罰であったな」ゼーリックは法律の内容を思い出しながら言った。

「その通りです」ギムレーはうなずいた。「では、刑を執行してもよろしいですか?」

「それが法律である」ゼーリックは不愉快になった。「そんなことをいちいち我が輩に質問する必要は無いのである」

「いつものように異論を申されても困りますので」

「異論など言うわけが無いのである」

「では執行致します」

立ち去りそうになったギムレーはそこで振り返って一言だけ追加した。

「そうそう、逮捕者の名前はパシブ・バンデベルと申します」

「なにいいいい?」

ゼーリックが目をつり上げたがギムレーは既に立ち去るところだった。

パシブ・バンデベル、つまりゼーリックの専用艦ゼルグートII世の艦長、パシブ・バンデベル准将その人だった。それだけではない。彼はデスラー暗殺計画のことも知っている腹心だった。絶対にデスラー派のギムレーに渡してはならない人材だった。しかし、その相手がギムレーの手中に渡ってしまい、しかもあろうことかゼーリック自身が処罰の執行を肯定してしまったのだ。

ゼーリックのバンデベルへの面会は可能だった。

「はめられました」とバンデベルは告白した。

「はめられただと? どういうことであるか」

「ただ酒を飲ませるといふ男の誘いに乗って飲み過ぎました。自分では服を脱いだ記憶がありません。外で寝た記憶もありません。おそらく誰かが服を脱がして屋外に放置したものだと思われま

事実として、バンデベルは忠誠心もあり、信用できる男であったが、脇が甘いという問題は昔からあった。つけ込まれやすいのだ。

「我が輩が手を回して、いつまでもギムレーのところに拘留される事態だけは回避できるようにするのである」とゼーリックは言った。「しかし、ゼルグート II 世の艦長職は絶望的であろう」

「後任には誰を」

「決まっておらぬ。しばらくは副長に任せるしかあるまい」

「はあ。あの堅物ですか」

「堅物でも、脇が甘い男よりはマシである」

結局、ゼーリックは手を回してバンデベルの処罰を【左遷】に変更させた。さすがに無罪にするのは無理があった。バンデベルは戦闘空母を与えられて小マゼランの最前線に旅立っていった。

その頃のガミラスの情勢はかなり微妙だった。

デスラーの支持率低下に歯止めが掛からなかったのだ。為政者としてのデスラーの支持率は1%程度まで落ちていたと言われるほどだ。もちろん、独裁者デスラーにとって、支持率とは独裁者の地位を危うくさせる要素ではなかった。独裁者に選挙は無いのだ。

しかしながら危機感があった。

独裁者の政権交代は可能だったからだ。手段はクーデターか暗殺だ。そして、親衛隊ギムレーの活躍により、クーデターの可能性はほぼ摘まれていた。残る方法は暗殺しかない。

ゼーリックはまさにその暗殺を計画していた。しかし、ゼーリックは楽観していた。なぜなら、デスラーの支持率低下は著しく、反乱軍への支持は手厚かったからだ。ギムレーも、全ての反乱軍支持者を検挙することまではできない。それを行えばバレラスからほとんどの人がいなくなるからだ。

一方のデスラーはといえば、支持者を集めた大演説会を行ったり、ギムレーに高圧的な警察活動を行わせたりしていた。それらは支持率低下への

焦りの現れとも言えた。

しかし、ゼーリックはそれだけではないことを知っていた。

衛星軌道上に建設中の第2バレラスは新しい首都だ。支持者の中から更に選りすぐった者達だけをそこに移住させ、イスカandalに行くつもりだ。つまり、反デスラー派ばかりのガミラス本星は見捨てるつもりなのだ。

それはガミラス愛に溢れるゼーリックの許容の範囲外にあった。

ゼーリックは自らの邸宅に戻ると、「そろそろ頃合いであるな」とつぶやいた。

つまりデスラー暗殺計画の発動だ。

バンデベル逮捕に関連してどんな情報がギムレーに漏れたか分からない。もし、ギムレーが本気を出せば、バンデベルに気づかないうちにいろいろな情報が持ち去られた可能性があるからだ。

だが、悠長なことは言っていられなくなった。秘書の1人の故郷であるオルタリア自治区がギムレーによって壊滅させられたのだ。

「どういうことであるか」

「反乱です」と秘書は説明した。「オルタリアで反ガミラスの反乱が起きたのです」

「それはオルタリア人の何割が賛成した反乱であるか？」

「おそらく6割ぐらいかと」

「残りの4割はどうなのであるか？」

「おそらく親ガミラス派です。ガミラスの支配を前向きに受けいれている人達です。オルタリアには、一生のうちに1回でもバレラスに行きたいと願っている人達もいました」

「おまえはどうなのであるか」

「バレラスは夢の国です。オルタリアには無い珍しいものがあります」

「当然である。バレラスには征服されたあらゆる星の文物が集まるのである」

「一度バレラスを見ると私たちは井の中の蛙、田舎者に過ぎなかったこ

とが痛感されます」

「何が言いたいのであるか?」

「バレラスに来た自分にはそれが分かりますが、オルタリアから出たことも無い大多数のオルタリア人には分かりません。反乱を起こせばガミラスに勝てると錯覚していました」

「しかし、それは6割なのであろう?」

「はい」

「親ガミラス派4割を殺して良い理由にはならないはずであろう」

「そう思います」

「おのれギムレーめ。あいつは何も分かっておらん」

ゼーリックの目的は殺戮ではない。むしろ殺戮は避けたいのだ。数こそが正義なのだ。殺戮しては数が減るではないか。もちろん、敵対する相手は数の内に入らないので、【殺す】という選択肢が浮上することもある。しかし、もしも帰順の可能性があるなら、単に殺せば良いという話ではない。ゼーリックが掲げるガミラス純血主義とは、ガミラス人以外を根絶やしにする思想ではないのだ。あくまで、純血ガミラス人が統治する大帝国の理想とする思想なのだ。

ゼーリックはバラン視察に向かうデスラーの乗艦デウスーラの爆破に成功した。

バンデベルから情報が漏れて妨害される可能性を怖れていたが、それは杞憂だった。

デウスーラは宇宙の藻屑と消えた。

しかし、全てが終わったわけではない。

ガミラス艦隊を掌握する作業が残っているのだ。

命令系統が別のギムレーの親衛隊の艦隊を掌握するのは無理だが、その他の通常部隊は中央軍総監のゼーリック国家元帥の影響下にあったのだ。

ゼーリックはバランで観艦式を行う指示を出し、全軍集結を命令

した。

バンデベルの艦長代行となったゼルグート II 世の副長が報告した。

「総統府直轄の特務艦、親衛艦隊以外はほぼ 99%の艦艇がバランに集結する見込みです」

「わははは」とゼーリックは大笑いした。予想よりも多い。最悪の場合、半数の艦隊しか集まらないと予測したのだ。

しかし、デスラーの死を公表して集結した艦隊の何割がゼーリックの配下に入るのかは分からない。

バラン星の銀河方面作戦司令長官ゲールがやってきた。

隙のあるバンデベルと違って艦長代行の副長はゲールをどの程度の身内として遇して良いか分からなかった。だから、通常の保安規定を適用し、拳銃のブリッジへの持ち込みを拒否した。特に敵対する意志のないゲールは拳銃を警備兵に預けてブリッジに上がった。

そのまま観艦式をゲールが取り仕切った。

副長にはゼルグート II 世の指揮官としての仕事があり、それは助かることだったので意見は付けなかった。

艦隊が揃ったところで、ゼーリックはデスラーの死を公表した。ゼーリックの指揮権の確立に異議を唱える者はいなかった。

そこにテロンの船が襲来した。

それを曙光と感じたゼーリックは攻撃を命じた。

そこで起こった事実の解釈は混乱していた。

ガミラス内部の抗争にあまり関わっていないゲールはそれを同士討ちと認識して止めさせようとした。

しかし、実際にはデスラーの死を知って身の危険を感じたデスラー派艦艇がヤマト迎撃を口実にその場を逃げだそうとして、ゼーリック派艦艇と交戦したのが真相に近い。混乱状況で衝突事故なども多発したが、真相はヤマト出現を好機に発生した派閥争いなのだ。

従って、大多数の艦艇がゼーリック側にある今こそ、敵対勢力を排除する好機なのだ。ゼーリックに戦いを止める気など一切なかった。

た。むしろ戦いを続けさせたかった。ヤマト攻撃などどうしても良かったのだ。デスラーの復讐に襲ってくるデスラー派の艦艇と軍人こそがゼーリックの敵だったのだ。そしてゼーリックの味方は数だった。数こそが正義だった。支持率 1%のデスラー総統の支持者はどうせ艦隊内にも 1%程度しかいないのだ。

ヤマトがバランに落下し、戦闘は一段落した。明確に叛意を見せたデスラー派の艦艇もおおむね姿を消した。

ゼーリックが満足したその瞬間、生きていたデスラーからの通信が入った。

デスラーはゼーリックを暗殺の首謀者として糾弾して、お得意のカリスマで人心を掌握しようとした。

「違う、断じて違う!」とゼーリックは血走った目で力説せざるを得なくなった。

ここで歴史が大きく舵を切った。

本来デスラー総統への忠誠心が厚いゲールは、あくまでデスラー中心のピラミッドを上げる手段としてゼーリックに取り入れたのだ。しかし、反デスラーと分かった今、ゲールにはゼーリックを生かしておく意味など無かった。

しかし、射殺するための拳銃は警備兵に預けたままだった。

ゲールはナイフを手に飛び出した。

だが、拳銃と違ってナイフによる刺殺はタイムラグがある。

ゼルグート II 世の副長がそれに気づいて体当たりした。

ナイフは宙を飛び、ゲールによるゼーリック殺害は未然に塞がれ、ゲールはゼルグート II 世の保安員に逮捕された。

「見たか!」とゼーリックは叫んだ。「これがデスラーのやり口である! デスラー暗殺が罪だというのなら、デスラー自身もこの私を殺そうと刺客を送ってきたのだ。この汚いやり方を諸君らは認めるのであるか!」

もちろん、この演説は事実を誤認している。そもそもゲールはデ

スラーの送り込んだ刺客ではないのだ。

しかし、状況はイーブンに戻った。一時はデスラーを謀殺したゼーリックから離れつつあったガミラス兵士達の心が戻って来たのだ。状況がイーブンなら、もともと支持者の多いゼーリックの方が有利だった。

だが、ゼーリックは安心できなかった。

デスラーが無策で通信を送ってきたはずがない。

事実として、デスラーはガミラス唯一の潜宙艦 **UX-01** の艦内にいて攻撃不可能。そして、第2バレラスとデスラー砲という切り札まで隠していたのだ。

そこにテロンの船の浮上が報告された。

ゼーリックは即座にテロンの船との停戦を申し入れた。なぜなら、敵の敵は味方だからだ。ヤマトはゼーリックから見れば必ずしも敵ではなかった。要するにガミラスへの帰順を表明するなら、それで受け入れることができる蛮族に過ぎなかった。それに対してデスラーは本物の敵だった。ここで蛮族のヤマトごときを相手に戦力を消耗などできなかった。敵はデスラーなのだ。

事実としてその判断は正しい。デスラー砲を使用するデスラーを相手にした場合、どれほどの大艦隊でも十分ではないかもしれないのだ。

面食らったのはヤマト乗組員の面々だった。

ヤマト側は balan 星のコアを破壊し、その寸前に亜空間ゲートを抜けるという綱渡りのような作戦を計画していた。しかし、綱渡りなのでやらなくて良いものならやりたくはなかったのだ。

しかし、ゼーリックの立場が説明されると、ヤマト側の空気も変わってきた。

要するにヤマトはイスカンダルに行ければそれで良かったのだ。ガミラス大艦隊と交戦しないで済むならそれに越したことは無い。

交渉はすぐまとまった。

ゼーリック側はヤマトの亜空間ゲートの使用を認め、イスカンダルへの安全な航行を保証する。その代わりに、ガミラス本星に進撃するゼーリック主力艦隊に同行し、その指揮下に入る。ただし、その時点でヤマトに要求されたのは第2バレラスに対する遠距離からの波動砲の一射のみだった。それも乗員の退避勧告が出された後のことだった。第2バレラスにいるのは全員デスラー派というわけではない。一般工員もまだいたのだ。彼らに待避するための時間を与えない選択はゼーリックには無かった。ゼーリックの信念は数こそ正義なのだ。敵対していない者まで数を減らす殺戮は忌避すべきものなのだ。

ヤマトは艦隊のしんがり配置された。それは止むを得ない。昨日までの敵なのだ。しかし、それは好ましいことではない。よりゼーリックの反乱軍を知りたい沖田と、艦隊内から不仲の芽を摘み取っておきたいゼーリックの思惑が一致し、ヤマトでの会食が設定された。

平田がオムシス全開で用意した美食が沖田一行とゼーリック一行の前に用意された。

しかし、空気は陰悪だった。

あくまで地球人を蛮族扱いしようとする尊大なゼーリックは、地球人のプライドを刺激したからだ。

島や相原は視線で人を殺せるものならゼーリックを殺せるぐらいの視線で彼を睨んだ。

しかし、地球人の中で最初に例外的な行動に出たのが古代進だった。

「自分の父親と、どことなく似た感じがします」

古代はゼーリックに酒を注ぎ、親しく話しかけた。

「自分はメルダ・ディッツというガミラス人パイロットを知っています」

「ディッツ……。思い出した。あの航宙艦隊総司令官だったディ

ツツ提督の娘がそのような名前であったな」

「自分は彼女とはわかり合えると信じました。ですから、閣下ともきっと何か通じ合えるものがあると思います」

「ほほう。だが、我が輩は蛮族と対等は思っておらんぞ。対等ならなぜテロンの船は今我が艦隊に随伴しているのであるか？」

「対等は思っていない」

「どういうことであるか？」

「波動エンジンと波動砲が無ければ、ヤマトはガミラスと同じ立場に立てませんが、それはイスカンダルの技術です。地球には残念ながら対等と言える技術はありません」

「では地球はガミラスに帰順するというのであるか？」

「それは地球政府が決めることです。しかし、一方的な隷属は難しいと思います」

「一方的な隷属と誰が言ったのであるか」

「は？」

「我が輩のガミラスに帰順した場合求められるのは、若干の軍事力の派出と、若干の納税義務だけである。自治権まで奪おうとは思わぬ。実際にガミラスの版図にも自治領はいくつも存在しているのである。それに、ガミラス臣民としての権利は授与される。帝国内の様々な惑星との交易も可能になり、それは免税である。帰順すればメリットも多いのである。それにも関わらず、いたずらに戦って滅びることを望むのであるか？」

「しかし、ゼーリック元帥。地球は遊星爆弾の攻撃を受けました」と沖田は口を挟んだ。「それはどう判断すればよろしいのでしょうか？」

「それは我々の敵、デスラーのやり方である」

「では、ゼーリック閣下がガミラスを掌握した場合、遊星爆弾による攻撃の再開は絶対に無いとおっしゃるのですか？」

「絶対という断言は無いのである。しかし、順番は変更されるで

あろう。まずは帰順の要求。そして、それが通らずとも翻意を求め  
るために、可能な策は全て取る。遊星爆弾の使用はそれでも帰順し  
なかった場合に限られるのである」

「なあみんな」古代は言った。「ゼーリック閣下を信じようじゃな  
いか」

「だが、我々の一存で地球のガミラス帰順は決定できないぞ」と  
真田が口を挟んだ。

「それはデスラーを倒した後で、ゆっくり話し合えばいい。それ  
よりも、ゼーリック閣下の言葉が事実ならば、デスラーも波動砲を  
用意していることになる。そうなればヤマトの優位性も失われる。  
単なる数の勝負になったら一隻しかいないヤマトでは勝てない」

「それはガミラス人に屈従してまで共闘すべきという意味かね？」

「それが地球を救う道なら、あえて屈従すべきです」

「良く言ったのである」とゼーリックが大笑いして古代の背中を  
叩いた。「従順し我に付き従う臣下は悪いようにはしないのである。  
古代が困っていれば、配下の艦隊をいつでも派遣してやるのである」

最終的に、なぜか気の合った古代とゼーリックは、肩を組み合っ  
て酒を飲んで騒いだ。島や相原は呆然とそれを見ているだけだった。  
しかし、沖田は、もはや地球は1人ではないと言う事実を心に飲み  
込んでいた。

そして、真田はゼーリックから古代に贈られたメダルに見入って  
いた。それは波動エンジン以上に精緻な工芸品で、地球の技術では  
真似すらできないものだった。真田も真田なりに、ガミラスと戦う  
ことの無意味さを嘔みしめていた。

さて、観艦式のためにバランに集結した艦隊にいたデスラー派は  
百隻程度。大半は撃沈され、脱出できたのは三十余隻に過ぎなかつ  
た。当然、残りの約1万隻はゼーリック側に付いた。

ゼーリックから気に入られた古代は連絡将校として、ゼルグート  
II世に乗り込んだ。

緊張する古代をゼーリックはゼルグートⅡ世内に用意させた専用の私室に案内した。

食堂からボーイが酒と料理を運んできた。

料理は摩訶不思議な物体だった。

「これは……、食べ物なのか？」

「マゼランパテ。ゼルグート士官食堂の厨房自慢の酒の肴である」

「これは美味しい。こんな美味しいものが宇宙にはあったのか。酒が進む」

「ははは。もっと食べるのである。そして飲むのである」

「ここにはどんな酒があるんだ？」

ゼーリックはボーイに命じた。「本日のメニューを見せるのである」

「士官食堂用のものしかありませんが」

「構わん。今どのような酒が厨房にあるのか我が輩も知りたくなつたのである」

ボーイは即座にメニューを差し出した。

ゼーリックはざっと一読すると、古代に渡した。「これが本艦の士官食堂のメニューである」

「で、どれが酒なんだ？」

「ここからここまでです」とボーイが説明した。

「メニューの半分以上が全部酒？」

「何かおかしいことがあるのであるか？」ゼーリックが笑った。

「いや。メンタリティは同じだな」

「今夜は我が輩お勧めの酒を一緒に全部試すのである！」

ゼーリックお勧めの酒は強い酒ばかりで、古代はすっかり酔ってしまった。しかし、ゼーリックは顔色一つ変えずに飲み続けた。

「もう限界か、古代。ふがいないぞ」とゼーリックは笑った。

「そんなことはありません！」古代はしぶとく粘って飲み比べを何とか引き分けに持ち込んだ。つまり、士官食堂の厨房が閉まり、運ばせた酒瓶が全て空になるまで持ちこたえたのだ。

「古代、分かるか。おまえのような人材こそが帝国を作るのである」ゼーリックは古代の健闘を讃えた。

「帝国はガミラス人が作るのではないのですか？」

「ガミラス人は統治するのである。作るのは諸君らだ。諸君ら抜きに大帝国は成立しないのである」

「どういう意味ですか」

「このゼルグートⅡ世にしても、建造の指揮を執ったのはガミラス人であるが、細部を設計し実際に組み立てたのは異民族の技術者達である」

「なぜ異民族をそこまで優遇されるのですか」

「優遇するのは何か優れた一芸を持った者である。巨大な帝国を持つメリットはそこにある。探せば特定の技能だけはガミラス人以上の人材がいくらでも発掘できるのである」

「そのような人材を集めてチームを組めば宇宙最強であるかと？」

「分かっているではないか、古代よ」

「では才能の無い者はどうすれば？」

「凡人を無価値と思うのは愚か者である。凡人から生まれた天才など、それほど珍しくはないのである」

「では宇宙は何だとお考えですか？」

「宇宙は母なのだ。そこからあらゆる者が産まれてくる。しかし、悲しいかな、そのままでは別の星に生まれた者達が協力することは永遠にない。ガミラスとは、彼らを帝国に統合して協力するチャンスを与えるシステムなのだ」

「自分も宇宙は母だと思います！」古代も何回もうなずいた。

翌日、すっかり打ち解けた古代はゼーリックに進言した。「艦隊の規模が大きすぎて進撃速度が遅すぎます。一部を分離して他を狙わせてはどうでしょうか」

「ふむ」

「ならばレプタポータ攻略はどうでしょう」とゼルグートⅡ世の

副長が進言した。「あそこの収容所には多くの味方が収監されています」

艦隊の一部は本隊を離れてレプタポータに向かった。

しかし、レプタポータ攻略は思わぬ副産物を連れてきた。

ドメル夫妻エリーサと、ガル・ディッツ元宇宙艦隊総司令官だ。

デスラー派の最後の砦として決戦を挑んできたドメルは、妻がゼーリック派の艦隊にいると知ると降伏した。もともと戦力が少なすぎて勝ち目は無かったのだが、エリーサの存在がドメル降伏の口実となった。

そして、ディッツは元々全艦隊を統率していた関係上、デスラーを乗せて逃走中の潜宙艦 **UX-01** の弱点を熟知していた。

「ディッツ君、貴公は我が輩に協力してくれるのであるか？」とゼーリックは質問した。

「ゼーリック元帥の統率に **100%** 賛成したわけではないが、状況からして今更ガミラスを私物化するデスラー派には鞍替えできない」

「相変わらずいけ好かない奴である」

しかし、ディッツのアドバイスは有効だった。

潜宙艦 **UX-01** は一定時間ごとに通常空間に浮上する必要があるという弱点があった。探知できない亜空間に永遠に潜むことはできないのだ。

それに対する対策は簡単だった。

多数の艦を持つゼーリック艦隊はガミラス本星の周囲に全艦隊を分散配置して網を張るだけで良かった。もちろん、**UX-01** には個別に散開した宇宙艦を撃沈してしまうという手段もあったが、撃沈すれば居場所を暴露してしまうだけだった。

その対処は意図しない別の効能を持ってゼーリックに味方した。

デスラーが第2バレラスに移動しないように妨害できたのだ。

第2バレラスに隠されたデスラー砲装備の戦艦デウスーラ II 世こそがデスラーの切り札であった。しかし、そもそも **UX-01** でそこま

で接近できない以上は存在しないのと同じだった。

その後、第2バレラスを統括していた、デスラー派のヴェルテ・タランは自ら孤立したことを自覚して降伏した。その結果、ゼーリックは無二のお宝を手に入れたことを知る。それはデスラー砲装備の戦艦そのものだった。デスラー最後の切り札が意図せずして手に入ったのだ。

ゼーリックはすぐにそれを赤く塗り替え、ゼルグートIII世と改名させ、旗艦をその艦に移動させた。

ゼルグートIII世で大艦隊を率いてバレラスに帰還したゼーリックは歓声で迎えられた。

しかし、残ったデスラー派は警戒網を解除した第2バレラスの占拠という暴挙に出た。

デスラー自ら指揮して異次元に潜航したUX-01で第2バレラスに接近し、占拠してしまったのだ。

デスラーは第2バレラスそのものをバレラスに到着するコースに乗せて自らは部下と共にUX-01で脱出した。

「新しい首都として建設された第2バレラスは巨大すぎてデスラー砲でも破壊しきれません」と副長が叫んだ。

「うぬぬ」ゼーリックは悔しがった。

「待ってください。ヤマトの波動砲と同時に使用すれば大質量の第2バレラスを破壊できるはずです」古代進が進言した。

「テロンの船はガミラス本星のために撃ってくれるのであるか？」

「自分が説得します」古代は力説した。

「よろしい。古代の言葉を信じるのである」

「閣下！ ここは全員をバレラスから脱出させた方が！」

「今更そんな時間は残っていないのである」

宇宙戦艦ヤマト側では、約束にない波動砲発射を行う義理はないという空気で満ちていた。ヤマト側でガミラスに好意的なのは、なぜかゼーリックとウマが合いガミラス艦に連絡将校として乗り込ん

だ古代だけだ。

だが沖田は決断した。

「確かにゼーリック閣下は尊大すぎて、反感を持つ乗員も多いと思う。だが、この第2バレラス落下で無垢のガミラス人が死んで良いという話も無い。それにここでガミラスを助ければこの後の地球の扱いが良くなるかもしれん。南部、波動砲を撃て」

「じ、自分が、でありますか!?!」

「古代がゼルグートIII世に乗っている以上、おまえが撃つほかあるまい」

「わ、分かりました」

「大丈夫かよ、おまえ大砲屋だろう?」と島が笑った。

「だ、大丈夫だ。任せろ」

そして、伝説にもなったゼルグードIII世と宇宙戦艦ヤマトの波動砲2連同時発射がバレラスの空を貫いた。

それは地球とガミラスの共闘の始まりを示すために打ち上げられた花火のようにも見えた。ゼーリック政権が確固たるガミラスの守護神であることを示すと同時に、ガミラスの誰も倒せなかった蛮族の戦艦すら従えるゼーリックの度量の広さもバレラスの人々に印象づけた。

かくして、バレラスから消えて行方が知れないギムレーと親衛隊。そして、彗星帝国の食客となり再起を狙うデスラーはまだ健在なれど、ヤマトの無事なイスカンドルへの航海は絶大なるゼーリックの庇護により保証されたのである。

- 完 -

## 若干の補足

- 本小説はフィクションに対する架空戦記という二重のフィクションとなっている
- 従って、本作は宇宙戦艦ヤマト 2199 というアニメ作品に対する架空戦記である
- 当然ながら本作は純然たる 2 次創作であり同人小説である
- 本作のアイデアは、ヤマト 2 のバンデベルの振る舞いは脇が甘いという認識から、ヤマト 2199 のバンデベルも脇が甘いという認識によって得られている。つまり、バンデベルの甘さがゲールによる拳銃の持ち込みを許し、ゼーリック殺害を許したという解釈である
- 従って本作はバンデベルを退場させる点のみ大幅な歴史改変を行う。その後は自動的に歴史が変化するという観点で書かれている。それによりゲールによるゼーリック殺害は失敗し、ゼーリック対デスラーのガミラス内部闘争が勃発する
- 連絡将校として敵艦に乗るメルダ相当の立場をヤマト乗組員に与えたいと考えたとき、ガミラス人に好意的な人物を割り当てる必要がある。候補は、山本か古代に絞られる。単純にメルダをパイロットと認識するなら対応するのは山本なのだが、山本ではゼーリック個人とは接点が無い。その点、古代には「違う、断じて違う」という共通の台詞を言うという接点がある。そのため、ここでは古代が連絡将校と設定している。
- ゼーリックと古代の気が合っているのは、メルダと山本の気が合っていることに対応する。
- マゼランパテのシーンにユリーシャが登場しない理由は、ヤマトへのユリーシャ乗艦という情報はデスラー派だけが持っているという解釈による。そもそも、七色星団の決戦が成立していないので、特殊部隊がヤマトに入ることはなく、星名は負傷しない。従って、ヤマト艦内のユリーシャ本人はまだ覚醒していない解釈である
- アニメ本編ではガミラス反乱軍のヤマトの共闘は実現していないが、

実現しない理由は交渉相手がディッツだったからであり、他の誰かなら成立したであろうというアイデアに基づく

- ゼーリックがヤマトとの共闘を許容する根拠は、敵の敵だからである（ゼーリックの敵はデスラーである）
- デスラーの支持率が 1%という数字の根拠は、三千隻の無敵艦隊のうち、デスラーと合流したのはゲール指揮下の三十余隻という数字に根拠を持つ。一般的な支持率も同程度の割合と想定して 1%という数字を想定した
- 従ってデスラーの演説に対する熱狂も、僅か 1%の支持者を集めて行われたデモンストレーションという解釈を採っている
- **泥酔者を処罰する法律**は本作のオリジナル設定である。これはバンデベルを退場させる都合上創作された本作のみの追加設定である
- 本作は、ゼーリックを尊大で嫌な奴だが、悪人ではないという観点で書かれている。また同時に憎めない愛嬌もあり、支持もされているという前提で書かれている
- 最終的に 633 工区ではなく第 2 バレラス全体を落下させているのは、633 工区だけでは波動砲 1 射で破壊できるからである。物語を波動砲 2 連同時発射で閉じるには、633 工区よりも大きな物体が必要とされたからである
- また、ゼルグート III 世とヤマトの同時発射とした理由は、ガミラスを守りたいという純粋な気持ちをゼーリックも持っているという解釈による（態度は悪いが）
- **ゼーリック艦隊ついに勝つ**というタイトルは、とある架空戦記小説の元祖的な小説のタイトルのもじりであり、本作が架空戦記の一種であると表明する役割を持っている

## 遠野秋彦作品宣伝 2014/7/6 版

### 人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズイン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河に中に見えた人魚の正体は？ 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか？ 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは？

君の五感と股間を刺激する！

### コードネームはサターン V【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ！

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第3の主人公は読者の君だ!

### ミルクボーイ【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な9人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の1人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか?

そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か?

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は9人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?

人類は生き延びることができるか?

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!

### リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21で始まり Yak-3で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人が大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

## リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから生まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

## 異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか! そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊!

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版

## (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

## ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として困われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真

意とはいったい!?

## セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通の女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

## 魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか? だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の

秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説!

君は腕力では無く知力を試される!

## ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか! 勇者の伝説を! このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を!

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF版】

[http://www.dlsite.com/maniawork/=product\\_id/RJ039225.html](http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html)

イーネマス! 【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料)PDF版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画

家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり